

ふるさと再発見

～幕末維新と徳地～

日本一の軍勢力－徳地奇兵隊－

徳地の奇兵隊は当時日本一の軍隊でした。今回はその話をします。

元治元年（1864年）8月、奇兵隊は下関の前田砲台を守っていました。しかし、前年（文久3年）の報復としてやって来た四カ国の艦隊に激しい砲撃を受けます。結果は長州藩の完全な敗北。今までの戦い方が役に立たないことを知らされました。山縣有朋は「敵が上陸して以て進むを見て大いに悟る所あり、また、銃砲の利鈍は大いに勝敗に関係する事を学ぶ。」（艦隊から降りてきた外国の敵兵が上陸すると、ばらばらと隊列を開きながら進むのを見て大いに得るところがありました。また、銃の優劣（ミニエー銃）がはっきりと勝敗を決めることを学びました。）と、この敗北した戦いの中で、外国の進んだ戦い方を見た^{かいきゅう}と回顧録「懐旧記事」に書いています。

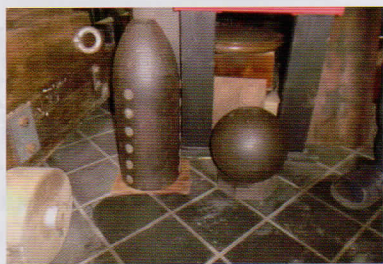
当時の日本の戦い方は、集団戦法と刀と弓・槍、銃はゲベール銃^{さんべいしき}でした。

射程距離	ゲベール銃	ミニエー銃
100m	70%	95%
300m	15%	55%
400m	4%	50%
最大射程	1～300m	6～800m

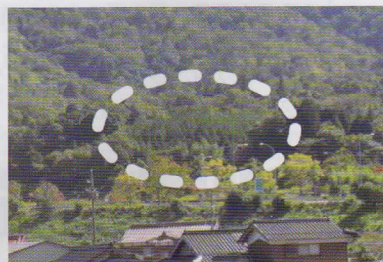
しかし山縣有朋は散兵式（個人戦）とライフル式の銃のすごさを見抜いたのです。ここに二つの銃を比較してみましょう。ミニエー銃のすごさに驚かされます。

奇兵隊士の金子文輔の日記では「馬関（下関）の戦争より、両隊（奇兵隊・^{ようちようたい}膺懲隊）共、弓・槍隊を廃し、専ら西洋風銃隊に編成し・・・」（県文書館蔵）と、下関戦争後、急速に西洋化した様子を書いていきます。敗戦後わずか3ヶ月で、徳地に駐屯した奇兵隊と膺懲隊は、最新のミニエー銃で武装して実戦配備されたであろうと推測されます。また、散兵式の銃陣訓練^{ちやうげつていん}が澄月院の上、「麓^{ろく}の河原^{かわら}」で行われたことも奇兵隊日誌に書かれています。

第2次幕長戦争（四境戦争）の時、15万人の幕府軍に対して約3千人の長州軍が大勝しましたが、その武器と戦術の原点がここ徳地にあったことが分かります。



西洋と日本の砲弾の違い
（小川忠治氏蔵）



小古祖「麓の河原」
（散兵戦術の訓練場）